
KILLER

夢喰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KILLER

【Nコード】

N4391E

【作者名】

夢喰

【あらすじ】

戦争で仲間を失った彼は、大人になって殺し屋になったが――

序章

曇天の下、小さな丘。そこに、二人の少年が居た。一人は頭の上の方で真っ直ぐな黒髪を結んだ背の高い少年、もう一人は少し紫の混じった黒髪に隻眼の隣の少年に比べると背の低い少年。

「……止めよう、と思う」

「……何を、だ？」

突如背の高い少年の発した言葉は、彼には理解出来なかった。当然の事、彼は『何を止めるのか』を問うた。その質問に何故か少年は苦笑し、そして何も答えないまま黙る。いつもと様子が違う事に、彼は焦った。

二人は何も言わないままで、空は雫を落とし始めた。そして、ザーツと勢い良く降り始める。服が水を吸い込んで、だんだん黒ずんで、重くなっていく。ふと隣に座っている少年を見た彼は、少年が泣いているように見えた。

「この、争いを、……止めようと思う」

「っ！？何言つてんだ……！？」

その答えに、彼は目を丸くした。ドクドク、と一気に鼓動が早くなる。争いを止める？そう言ったのか、この少年は？

「正確には、抜けるってことだよ」
抜ける？

それは、つまり――

「これで、お別れだよ、――」

「つぶさけるなっ！俺ら此処までやってきたじゃねえかつ！何だよ！？それに俺だけじゃない！あの二人もお前には抜けて欲しくないんだぜ！？何で――」

「すまん、だけど……決めたんだよ」

パニック状態に陥った彼を、少年は言葉で静かに鎮める。叫びすぎたのか、彼はひとつ乾いた咳をした。

「このまま、争っていても意味はないだろ？ 仲間が死んでいくのも、……こんな事言うのもおかしいけれど、敵を殺すのも、もう嫌なんだ」

「俺らが勝てば問題ないだろっ！？」

「……こちらが勝つても、……待っているのは……負だけだよ」
ジツと、何もかも吸い込むような黒い目に見つめられる。昔から知っていた。こういう目をしたコイツは、もう二度とその心を変える事はないという事を。泣き出しそうになる。だけれど涙を流すのは格好悪い、と思い、歯を食いしばって我慢する。人が死んでいくのが、人を殺めるのが嫌だというこの少年は、とても心優しいのだ。戦争に参加したほうがおかしかったのかもしれない。しょうがない事だ、と彼は思った。いや、自分に言い聞かせた、といった方が正しいのかもしれない。

「……抜けたら、どうするつもりだ」

大きな塊を、腹から出したような、そんな苦しそうな声で言った。そんな彼の心を映しているかのように、雨は激しさを増した。

「普通に生きる。争いとは一切関係ない、な。ただ、普通の人として生きたいんだ」

「……俺らは人じゃない、って言いたいのか」

そう言つて彼は笑った。苦い笑いでも、狂った笑いでも、もちろん可笑しさによる笑いでもなかった。まるで、自嘲しているような笑いだった。

「そういう事、ではないさ」

「……そうか」

言葉がそれ以上続かず、会話が途切れる。また、沈黙がおとずれた。少年は座りながらも真っ直ぐと前を見て、彼は立ったまま俯いている。

「いつ、だ？」

「明日の早朝、此处を離れる」

既に準備は整っている、と少年は付け足した。

「そうか……」

見送ろうか？と続けようとしたが、止めた。見送ったって、余計に悲しくなるだけなんだと思った。

「冷える、中へ入ろう」

「……ああ」

少年の言った通り、彼の体は冷えていた。ブルツと小さく彼の体が震える。

それは、体が冷たい為でもあったが、少年が此処から姿を消すことに対しての不安の所為でもあった。彼は少年を見上げたが、少年は彼の視線に気づかず、真っ直ぐ前を向いたままだった。

翌朝、少年の姿は何処にもなかった。

第一章

ざわざわと森の木々が冷たい風に吹かれて騒ぐ。鴉たちが、その木々から飛び立っていく。黒い空の下で、ピカリと雷が光った。闇の中で、ひととき目立つ建物があった。それは、巨大な白い獣が蹲っているような——それほど大きな、城だ。この城に、この国を治めている王が、住んでいるのだ。

キラキラと光るシャンデリア、白い壁には、必ず何処かへ通じる、黄金のドアがズラリと並んでいる。100人以上は席につけるほどの長い、豪華な料理たちが置かれているテーブルと座るとフワフワする椅子。テーブルの端と端で普通に会話をしても、声は届かないくらいに天井は高く、広間は広い。その大広間の中で、豪快な笑い声が響いた。

「そうか、隣の国の奴ら、やっと潰れたか！いい気味だ！」

白くて長くのびた髭を赤い紐で束ねて、豪華な服を何重にも着たこの男が、国王だ。彼が言っているのは、長年争ってきた隣国が、やっと降参した事だ。

「ふふ……今夜はお楽しみになって、アナタ」

国王の隣に座って微笑んでワインを国王のグラスに注いでいるこの存在感のある女性は、国王の妻——つまり、女王だ。存在感のある、といっても太っているわけではない。インパクトが強いのだ。

「国王ッ！失礼いたしますッ！」

「なんだっ！？」

急にパンツと音を立ててドアを開け、黒服の男が入ってきた。荒い息をして、冷や汗をかいている。それを見た国王は、何かあったのだと覚った。

「何者かが——浸入してきています。一階の仲間は一分で全滅です」

「！？相手は何人だ！？」

「恐らく、一人かと……」

「そんなわけがないでしょうっ！？少なくとも50人はいるのよ！
？それを一分で——」

それ以上、彼女の言葉が続く事はなかった。彼女の体が、バタリと音を立てて倒れた。

「……なっ！？」

一瞬の出来事だった。ゆつくりと、彼女の体の刃物のようなもので斬られた跡から鮮血が吹き出ていく。

「何が、起こって……」

ふと、後ろに人が立っているのを感じた。

「殺し屋参上。てめえらの命、もらった」

ドシャツ

国王の体も、男も倒れた。数分後には、城に生きている人間など、誰も居なくなつた。

「任務、完了」

城外で、人影が、クスリと笑った。

今日は快晴。昨日まで続いていた雨が嘘のように雲一つ無く、晴れている。

「少ないねえ……まあ、いい。あれは簡単すぎたし、な」

そう呟いてクスクスと、まるで少女のように笑う彼の右手には、札束が握られていた。そして、左手には黒いケースだ。恐らく、その中に大量の札束が入っているのだろう。

「ん、新聞くれや」

そばを通りかかった新聞売りの少年に、一声かける。そして、右手にあった札束の中から一枚1万円札を抜き出して、少年に差し出した。少年は、ボロボロの服を着てるからして貧乏なのか、その一枚を見て目を輝かせた。が、これは仕事だと思い、すぐに、新聞を彼に渡した。

「……あ、あの、おつり……」

「いらねえ。一枚受け取っとけ」

彼の言葉に少年は驚き、そして何度も何度も礼を告げた。彼は、近くにあったベンチに座り、新聞を広げた。

「……やっぱりか」

新聞には、昨夜国王が殺害された事が大きく載せられていた。当たり前だが、警察は犯人を捜索中ということも書いてある。

「次の国王は……国王の息子、王子だろうな」

昨夜外出していた王子が、帰ってきておらず、警察はそちらも捜索中と書いてあった。

「……奴の依頼の内容もおかしい、が……」

奴とは、彼に『殺し』の任務を依頼した者の事だ。今回の城に居る者を皆殺しにしたのは彼——狂咲だ。だが、その依頼をしたのは、グルデイという、彼が今回の依頼で初めて会った男。悠は男の依頼を聞いて狂っている、と思ったが、同時に楽しそうだと思っていた。だから、実行した。それだけの事だった。

「依頼内容は……『城内の者全員を殺せ』であって……国王の血を途絶えさせる事じゃなかった……。わっかんねえ野郎だな、グルデイって奴……ククッ」

悠は、何故か楽しそうに小さく笑った。

「……さて、まだ依頼が残っている……。さつさと片付けなくちゃな」

彼はそう呟いて、裏通りに姿を消して行った。

狂咲悠は、裏の世界では有名なプロの殺し屋だ。冷静で聡明な彼は、依頼を受ければすぐにそれを実行し、剣一本で確実に成功させる。報酬代がとつともなく高いのだが、誰もそんな事は気にしない。おまけに、彼は綺麗に整った顔立ちをしている。女性にも人気なのだ。本人は自覚を持っていないければ、興味もないらしいが。警察には、顔も名も知られていない。彼の事を詳しく知っている者などいない。

「次の標的発見」

赤いレンガ造りの家を見上げてから、彼はふっと笑った。

第二章

「次の標的は駒木春香か……」

彼が手に持っている写真には、一人の少女が写っていた。白いワンピースを着て、白い椅子に座っているだけの写真。腰まで届く長い黒髪と、何も映っていない黒目。やわらかそうな唇をきゅっとしめて、まっすぐこちらを見ている。この少女が、駒木春香だ。

「何故この女が標的かは分からねえが……頼まれたもんはやらねーとな」

ぽつりと呟いて、彼はレンガ造りの家のインターホンを押した。

『はい、どちら様でしょうか』

インターホン越しに、女性の細い声が聞こえてくる。が、その声は明らかに少女のものではなかった。

「伊藤蓮と申します。お嬢様の家庭教師です」

『ああ、新しい方ですね。どうぞ』

彼は、前日に、駒木春香に新しい家庭教師をつけようとしているのを偶然知り、伊藤蓮と名乗り出ていたのだ。

「では失礼します」

彼は先程までの怪しい気配は消して、一般の優しそうな男性になりきっている。

「春香はリビングで待っています。こちらへ」

「どうも」

スタスタと案内されるとおりに廊下を歩く。

そして――

「春香、伊藤先生がいらっしゃって――」

ズシャッ

「標的の居場所まで案内ご苦労」

何処から出したのか、彼は標的の母親らしい女を剣で斬りつけていた。

「お母さんっ」

ガタリと音がした。見ると、少女が母親だったものを見て、青ざめていた。写真と、同じ姿をしている。

「俺を恨むなよ」

そういつて、彼は少女、春香を斬りつけた——かのように見えた。

「……貴方は私の能力を……。能力を恨んで殺しにきたのですか」
「能力？」

春香が立っていた所には、大きな傷跡が出来ていた。

「……知らないのですか。なら……何故私を殺しに？」

「頼まれたからだ」

命を狙われているのに、何故この少女は平然としているのか。それは……今回が初めてではない、という事だ。それが何故か気に入らず、悠は剣を彼女の目の前に突きつけた。

「頼まれて、ですか」

「俺が殺し屋を名乗り始めてから……一撃で殺し損ねたのは初めてが初めてだぜ。興味が湧いてきた。お前の能力とやらを教えてもらおうじゃねえか」

「……私は、……人を殺す能力を持つて居ます」

「……ハッ、何を言い出すかと思えば」

彼は、馬鹿にしたように鼻で笑った。殺す道具と殺意さえ持てば、誰だって殺す事なんてできる。考えてみると、案外、人を殺すことなど容易な作業でしかないのだと悠は思った。だから、それを防ぐ為に警察がいるのだ、と。

「本当なんです！」

春香が悠を睨み付ける。だが、その瞳には弱々しい光しか宿っていないかった。

「道具も使わずに、か」

「はい。殺す事以外も出来ます」

“超能力者”

一つの単語が、一瞬頭の中を過ぎった。いや、殺しも出来る超能力

者なんて居るのだろうか。……居るのだ、それも目の前に。

「殺す事以外？」

「手を使わないで物を動かす、または変化させる——サイコキネシス。よくあるパターンですが……」

テーブルの上を見ていてください、と言われ、剣を彼女の目の前から動かさずに、視線だけテーブルに移した。そこには、何の飾りもなく、何も入っていないガラスのコップが二つ置いてあった。多分、さっき彼女と彼女の母親で何か飲んでいたのだろう。

パリンッ

ごちゃごちゃと色々考えている間に、ガラスのコップは砕け散った。二つとも破片になり、床に落ちていく。光が当たって、まるで雪が降っているようだった。

「テレパシーや透視、予知も、か」

彼の問いに、彼女は黙って肯いた。

「そのうえ殺しも出来ると」

この問いにも、こくり。

「おもしれえ……。が、俺には関係ねえ事だ」

チャキ、と春香の喉に剣を突きつける。彼女は、無表情ではあるが、頬に冷や汗が伝った。

彼女の首を刎ねようとした、その時だった。

ピンポンとチャイムが鳴った。彼女にとってはナイスタイミング、彼にとってはバッドタイミングだった。

第三章

しばらく、空間が凍りついたような沈黙。また、その間にピンポンとチャイムが鳴る。悠は、焦ってはいなかったが、こんな事は初めてだった。標的を一撃で殺し損ねた上に、その現場に標的の客が来るとは。

「……今日、客が来る予定はあったか」

「……いいえ、新しい家庭教師——貴方が来る事以外は」

「……そうか。……お前の父親は？」

「居ません。三年前、死にました」

「……そうか」

本当に、そうか、としか言えなかった。父親が死んだという事を、何の事にも思っていないように無表情で淡々と話すのだから。

「まあいい……お前が出る」

「はい」

剣を彼女から逸らし、悠はドアの方を見て言った。春香も、こくりと頷いてスタスタとドアに向かっていく。

「……どちら様でしょう」

悠の時に春香の母親がしたように、春香も誰なのかを聞く。そして、相手の声——恐らく男が、聞き取れはしなかったが、名を言った。それを聞いた春香の顔は、少し明るくなった。

「ああ、綾部さん。どうぞ、あがってください」

……綾部？

悠は、綾部と言う名が気になった。何処かで、何処かで聞いた事のある名前——

……などと、ごちゃごちゃと考えている暇はない。何せ、春香が客を招き入れたのだ。姿を見られたら困る。その男まで、殺さなくてはならない。悠は、とりあえず、姿が見えないように奥の方へ隠れた。会話が聞こえてくる。

「お久しぶりです」

「ホントに久しぶり。元気にしてた？……よね、元気よさそうだし」
「はい！このとおり！」

先程の、無表情な顔からは想像出来ないような、彼女の笑い声が聞こえてくる。会話の内容からして、二人は最近会っていないかったのだろう。それにしても、綾部という名といい、この声といい、気になる。綾部という男の顔を見れば、このモヤモヤが晴れるかもしれない。

「いつも世話になってたよ、春香ちゃんには」

「いいえ、父が亡くなつて母と二人で暮らしに困っていた時に、貴方が助けてくれたんですから、当然の事です」

何故か、今だ、と思った。今、男の顔を見ようと、思ってしまった。
「……純？」

昔の友の、愛称が口からぼろりと出た。すると、春香も驚いているが、それよりも驚いている者がいた。綾部という男だ。

「悠！？」

綾部——綾部純太が、彼の名を呼んだ。

「……お二人とも、知り合いなんですか？」

「知り合いも何も、昔からの親友だよ！どうして此処に？」

「てめえこそ……！」

「まあ、此処で立ち話もなんですから、どうぞ、中へ」

割れていない真新しいガラスのコップに、紅茶が注がれた。それを、目の前に置かれる。

「……で、お二人はいつからお友達になっけいらっしゃるんですか」
「その前に、純、お前……何故この女と」

「偶然知り合っただよ。情報収集の最中に」

「情報収集？」

「俺は『情報屋』ってのをやってんだ。その名の通り情報を集めるんだけど。主に裏の（・・・）情報だな」

「裏の仕事、つてわけか……俺もだぜ」

その言葉を聞いて、純太は「え？」と聞き返した。

「俺は『殺し屋』だ。さっきもこの女を殺そうとしていたが……丁度お前が来たつっわけだ」

「……綾部さんが来て下さってよかったです」

「そうか？俺は、今ここでお前を殺すこともできる」

悠は、また、春香の首に剣を突きつけた。と、その剣を純太が抑え、ニコリと悠に微笑みかける。

「殺すのはよくねえよ」

「こいつぁ頼まれた事だ」

「それじゃあ、断るべきだ」

ふっと真剣な顔になって、じっと悠の目を除きこみ、純太はそう言った。悠は、それじゃあ殺し屋の意味がない、と思いつながらも、仕方なく剣を降ろした。

「フン……」

「……で！お二人のご関係を！」

すでに、春香は、先程とは別人になっている。悠は、短くため息を吐いてから、話し始めた。

第四章

「昔、戦争があったのは知ってるか？王族の血が絶え、王の座を奪う為に貴族と貴族がぶつかりあい、そこから起きた戦争——“ヴィーヴ・スピラー” だったら分かるか」

「……歴史で、習った事があります」

「歴史で、か……」

ポツリと呟いて、悠は苦笑した。

“ヴィーヴ・スピラー” とは、簡単に言えば悠の言った通り、王の座を競い合った貴族達の間から生まれた大きな戦争の事だ。この戦争に正式名がないので、皆“ヴィーヴ・スピラー” と呼ぶ。教科書の端にその戦争が起きたと少し書かれているだけな上、春香のような年齢の子供がよく知っている筈がないのだ。

「俺らはその頃の戦友だ」

その言葉に、純太がピクリと反応して悠を見たが、彼は無言のまま目で黙っていると告げるかのように睨みつけた。そして、春香に視線を戻す。

「そうなんですか……。あ、じゃあ、その左目はどうなされたんですか？その包帯……」

「……！」

純太は、先程とは違って焦りと不安が混ざった視線を悠に向けた。

悠は無表情のまま、サラリとこう言った。

「おめえにそこまで言う義理がねえな」

その冷たい言葉に、彼女は黙り込んでしまい、誰もしやべらなくなってしまう。どんよりとした空気が漂う。やがて、純太がアハハツと声をあげて笑った。

「っ！？何だよ……？」

「二人とも面白い顔して睨めっこか！俺の負けだなっ！」

「これは真面目な顔だ！」

悠が怒鳴りつけたにも関わらず、純太は笑い続けた。春香も、それにつられ、クスクスと笑い出す。悠は訳がわからず、頭を抱えて、短いため息をついた。

「はあ……。俺は帰る。まだ仕事が残っているからな」

「え？私は殺さなくていいんですか？」

「殺すのも面倒臭くなつてな。殺されてえのか？」

「遠慮します」

なら聞くな、とだけ言い残して、彼はドアから堂々と出て行った。

「あら……。行っちゃった」

「……この遺体はどうするんだ？」

「うつ」

顔をしかめながらも純太が背中を斬られて倒れている遺体を指すと、その遺体を見た春香はすぐに真っ青になった。

「一応……。警察を呼んでおくよ」

「……はい……」

今頃異臭が臭い始めたような気がした。

「ええ……。帰ってきた時にはもう……」

警察の事情聴取に、春香が涙を流しながら話している。先に事情聴取を終えた純太は、その彼女の姿を見つめながら何やら色々と考えていた。

『素直に話せばいいのに……。何故悠の事を隠す？まあ、事実を言われたら俺もヤバイけど……』

『悠もまさか殺し屋になっていただなんて……。何故アイツは俺らがあの頃からの戦友だつて嘘をついたんだろう……』

彼の頭の中は疑問でいっぱいである。そして、それらの答えは一つも見つからない。と、突っ立っている彼の横を、春香の母親の遺体が運ばれていった。彼はチラリとそちらを見たが、またすぐに視線を春香に戻した。その顔はとても真剣だ。

「……さん？綾部さん？」

「へっ？あ、はい？」

急に警察官に覗き込まれ、ドキッと心臓が躍り上がったような気がした。

「大丈夫ですか？」

「はい……」

そう答えると、警察官がニコリと微笑んだ。

「シヨックですよね……。仲良しかった方が、お亡くなりになるなんて」

「ええ……」

同情しようとしてくれているのだ、この男は。きっと、殺人事件があるたびに被害者と親しかった者に、同情し続けてきたのだろう、と思った。

「元気、出してくださいね」

「はい、ありがとうございます」

またニコリと微笑んで、彼は仕事に戻っていった。

ふと春香の居た方を見ると、彼女は三人用の黒いソファーに腰掛けていた。その目は、虚ろだ。

「悠が、憎いか？」

「……本当だったら、憎んでいるでしょうね……。でも、私は——あの人の事、何故か憎めないんですよ」

一つ間を空けて彼女の隣に座って、問うてみた。すると、予想外なのか、予想通りなのかよく分からない答えが返ってきた。

「へえ……」

「あの人、哀しい人だと思います」

ピクリ、と純太が反応した。

「……哀しい？」

「ええ……」

彼には理解できなかった。何故この少女は、悠が哀しい人だと思う？また一つ、疑問が生まれた。

だが、純太はそれを聞かなかった。

聞いて、返ってきた答えが、悠にも自分にも、深い傷として残りそうなのがしたからだった。

第五章

「……………はあ」

今日初めての、ため息をつく。昨日の事で疲れているのだ。

殺し関係の事で疲れるなど、今まで一度もなかった。それほど彼はプロの殺し屋であり、それほど昨日出会った春香と再会した純太が彼を疲れさせたのだった。

「今日は珍しく依頼もきてねえし……雨でも降るのかねエ」

冗談めかしてそう言う彼は、ちっとも笑ってはいなかった。何かが起こる——そんな嫌な予感がしていたからだ。

本当に何もやる事などなく暇な彼は、ぶらぶらと商店街を歩いていた。透明なショーウィンドーに彼の姿が映っては消え、映っては消えと繰り返される。何も彼の興味をひく物など売ってはいなかった。元々、彼は必要な物を最低限でしか買わない男で、普段「殺し」の依頼で忙しい彼は、買い物にかける時間までが惜しいのだった。

彼の真横を男女のカップルが通り過ぎていく。自転車が、目の前の角を曲がる。小さな子供が、「これが欲しい！」と母親にせがむ。ゆつくりと、時が流れているような気がした。

「ん……………」

目の前の物を意識した時には、知らない道を歩いていた。

「……………何だアこのでけえ屋敷は……………」

周りの建物はどれも小さくて古そうな建物ばかりなのに、目の前の建物だけ異様なほど大きく、立派な物だ。まるで、御偉方が住んでいるようだ。その屋敷は、今日初めて彼の興味をひいた。理由は明確でないが、入ってみたいと思う。

——この屋敷に、入ってみたい。

「……………何考えてんだ俺ア……………」

どうかしているんじゃないか、とため息をついた。おかしい。最近、調子が狂ってきている。

もう此処に来ないようにしようと、彼は踵を返し、来た道を戻っていった。

その屋敷の門には、『伊井』と彫られた表札があった――。

「悠、此処に居たのか!」

「……………!? 純……………」

背後からいきなり声をかけられ、おそろおそろ振り返ってみると、そこには予想通りというか――純太がまるで太陽のようだととも言える笑顔を浮かべながら走り寄って来ていた。

「……………何だア?」

「情報だよ情報! この辺に王子がいるらしいぜ!」

「へえ……………王子がねエ……………で? お前は何故、それを俺に教えにきたんだ」

「ん? だって、しりてえだろ?」

きよんとする純太に呆れ、悠は本日3回目のため息をついた。

「どうした? ため息つくと、幸せが逃げるって言うぜ?」

「なら俺の幸せはとくに逃げてらア……………半分てめえらの所為でな」
最後の方は、ボツリと呟いていた。「何か言ったか?」と純太に聞かれたが、「何でもねえさ」と答えた。

「ああそう……………ならいいけど。それより、王子だよ、お・う・じ!」
興奮してずいっと顔を近づけてくる。鼻と鼻が当たるかと思った。

悠は「落ち着け!」と言って慌てて彼の胸をドンツと押して突き放した。だが、純太はそれを全く気にせず、またしゃべり始める。

「王子探し、やろうぜ。面白そうじゃねえか!」

「王子を探し出したらどうするんだよ」

「しらねえけど!」

ここまできつぱりと笑顔で言われれば、返す言葉がなかった。

「あのなア……………」

「あ、春香ちゃんだ」

「無視かよ」

はあ、とまたまたため息をついて、純太の視線の先を辿ると、確かに春香がこちらに手を振って近づいてきているのが見えた。昨日悠に母親を殺されたばかりなのに何故そんなに元気なのか不思議だったが、その前にズキツと頭痛がしたような気がした。最悪な気分だ。「聞きましたよ、王子が居るんですよね王子ッ！」

……最悪だ。

「そうそう！悠も探すって！」

「オイ、俺アそんな事一言も言っただろ」

悠の言葉はまったく聞こえておらず、春香も「まあ本当？」と言って目を輝かす。勝手に話を進めていく二人の会話を聞いていると頭痛が酷くなるような気がしたので、他人のフリをしながら何処かへ消えてしまおうと思った。が、その考えを読んでいたのか、純太が悠の肩を掴み、さあ行くよと爽やか過ぎる笑顔を浮かべ、自分より遥かに抵抗する小さな身体をズルズルと引きずって春香を連れ何処かへ行ってしまった。

第五章（後書き）

久しぶりに更新……（汗
短いすね；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4391e/>

KILLER

2010年12月10日14時40分発行